

# 「19年、或いは20年前。」

## ●上演記録●

東京学生演劇祭2016参加作品

晚餐ヒロックス「19年、或いは20年前。」

2016年9月1日〜4日（全4ステージ）

@花まる学習会王子小劇場

### 【キャスト】

・のあ・ふうこ	夏目楓子
・しよう・ハル	あずまゆう
・らん	久野祐希奈
・ペイロニー・前田・悪い子	前田敏光
・くう・先生	新田千佳
・子待つ・ネツ	小松弘季
・ともやす・カク	高野友靖
・ベツヤク	小田龍哉

### 【スタッフ】

・脚本 演出	渡部寛隆
・演出助手	持田愛
・舞台監督	青木来美
・照明	田所輝一
・音響	野崎爽
・美術	もりやまふみ
・衣裳	甲斐咲帆・佐々木鮎子
・音楽	神達拳仁
・写真	寺尾昂祐
・宣伝美術	F U J I W O ・馬路わかな
・制作	横見咲季

宇宙の中にある、地球のなかにある、ある母の、子宮の中である  
中央にある真っ白な御玉杓子がオーラを放っている  
ベツヤクが卵を御玉杓子に投げる

ベツヤク「ごめんなさい。」  
らん「なんで謝るの？」  
ベツヤク「ごめんなさい。」  
らん「ごめんなさい。」  
ベツヤク「ごめんなさい。」  
らん「ごめんなさい。……ミノル」

### 金の玉の中

満員のバスにパックをつけた無個性精子が乗っている

運転手「日芸発、はなまる学習会王子小劇場経由、子宮行き間もなく発射いたします。」  
無個性精子1「準備は万端だ〜」  
無個性精子2「ここから見える景色とも、もうおさらばっちゃね〜」  
無個性精子4「景色なんてないでしょ、お先真っ暗、お尻真っ白。」  
運転手「もう少しおつめください〜パンパンでございます。」  
無個性精子3「あ、あぶな、かった、の、れた」  
運転手「ドア閉まります〜みなさん、掛け声は大丈夫でしょうか〜」  
無個性精子たち「は〜い」  
運転手「それでは、ドア閉めさせていただきます〜」

と、大急ぎでもう一体の無個性精子が走ってくる

無個性精子5「乗ります乗ります乗ります」  
運転手「あけま〜す」  
無個性精子1「なんだなんだ」  
無個性精子2「たまにいるっちゃね〜こういうずうずうしいやつ〜」  
無個性精子4「お前の精で1分遅漏したんだよ」  
運転手「ドア、閉まります。それでは、掛け声行きます。」  
無個性精子たち「いっつっつっくううううううううう！」  
運転手「ありがとうございます〜」

一陣の風を受けて

無個性精子2 「どうとうきたっちゃね〜」  
無個性精子3 「と、とても速い、いき、おいが。」  
無個性精子5 「ねえ！ね！僕たちは今からどこへいくんだい！」  
無個性精子1 「な、お前それもしらずにバスに乗ったのか。」  
無個性精子5 「うん、おもしろそうだったから！」  
無個性精子4 「お前みたいなのは絶対なれないよ」  
無個性精子5 「何になるんだい！」  
無個性精子4 「さあな。」  
無個性精子2 「もうすぐつくっちゃ〜」  
無個性精子5 「なんかくるよ！」  
無個性精子1 「ん？なんだあれ」

ベツヤクが近づいて来る

無個性精子5 「ね！」  
ベツヤク 「お前、今俺に話しかけたのか！」  
無個性精子5 「ん！ああ〜うん」  
ベツヤク 「ありがとう。」  
無個性精子5 「君も僕たちと一緒にい！」  
ベツヤク 「いや、昔はそうだった。」  
無個性精子5 「ん？」  
ベツヤク 「俺の名前はベツヤク、よろしく。」  
無個性精子4 「なんだこいつ〜？」  
無個性精子2 「着くっちゃね〜」

無個性精子が到着する

無個性精子5 「あれ、さっきのは！」  
教官 「はいはいはいはいはい、お疲れ様でした。よくここまでたどりつきました。とり  
あえず第一関門突破ね。よーやりあんした。」  
無個性精子3 「き、きみは、だれなの」  
教官 「あたしにアンタだと聞くとはなかなかの度胸ね。ほめてあげる。どうもここの教官をやっています。ペイロニーでござんす。」  
無個性精子5 「これからぼくたちはどうするの」

教官改めペイロニー「わっ劣性、劣性。ないわくあんた何しに来たのよ！いいかい、(冊子を配る)あんたたちは今宵、後ろ聞こえる！？今宵、今回の米、青、子、から階段を上るためにいや、宿すために此処に来ました。見えるかい、空と、海が重なる、いや、ちようどあの真ん中にたどり着かなくてはいけない。だけど、それは、酷であり、運でもあり、勝負なの。まあ、何が言いたいかというと優性になるためには努力が必要ってこと。はい冊子読んでいてね。ところで、あーたたち、バスに乗ってきたでしょ。どっから来たんだっけ？」

無個性精子4「えっと………江古田！」

無個性精子2「日芸から来ました。あんまり頭は良くないけど、倍率は高いっちゃね〜」

ペイロニー「ふーん。あんた何コース。あっそう。4年間で何学んだの。あっそう。まあ、

じゃあ私は行くね。」

無個性精子5「また会いましょう！」

ペイロニー「あーた今なんて」

無個性精子5「……また、会いましょう……」

ペイロニー「その言霊に、責任持った方がいいわよ。じゃ。」

無個性精子3(冊子を見て)「あ、やっぱり、すごい、ばいりつ」

無個性精子1「日本大学芸術学部演劇学科演技コース平成24年度一派入試倍率8.5倍……

……」

無個性精子2「日本大学芸術学部放送学科平成25年度AO倍率……」

無個性精子4「日本大学芸術学部映画学科平成23年度撮影・録音コース公募推薦倍率……」

### 全員で日芸の倍率を読み上げる

無個性精子5「そして、僕たちがこれから挑む倍率。」

無個性精子たち「3000000000倍！」

無個性精子1「しかも、全滅の可能性もあるぞ！」

無個性精子たち「うわああああああああ」

無個性精子2「そう考えると日芸って楽にはいれる大学っちゃね。」

無個性精子たち「うわああああああああ」

### 無個性精子蛙鳴蟬噪

無個性精子1「とりあえず、あの場所まで泳ごう！」

無個性精子たち「あい！」

濫觴。らんとしよう。たった今「生」をうけた2人である。

らん「オギヤー」  
しょう「オギヤー」  
ベツヤク「この時、割れ目を境に記憶に切れ目をいれる。」  
しょう「ばぶばぶばぶばぶばぶばぶばぶばぶばぶばぶあ」  
ベツヤク「なんかよく分からなかったけどととつても大変な思いをしたな」  
らん「あむあむまうまうむむむまうむあむまうむあ」  
ベツヤク「そうねくでもなんだか不思議な感覚がするよ」  
しょう「ばぶばぶばぶばぶ」  
ベツヤク「いろんなものがついてる」  
らん「あんっむむむんま、まあ」  
ベツヤク「でも、身体が重くなった感じがするね。」  
らん「あむ、むんま、めもみむま」  
ベツヤク「ところで、そこいる白いものはなに？」

### 混沌の間

ベツヤク「なに、今なんて」  
らん「あむ、むんま、めもみむま」  
ベツヤク「なんで見えるんだ。」  
らん「もうみむめ」  
ベツヤク「そちらこそ」  
しょう「ばぶばぶべ！………なんの会話してるの！」  
らん「え？みえないの？」  
しょう「なにが！」  
らん「白いの！」  
しょう「ああ、この管のこと？僕たちの呼吸を…」  
らん「違うよ！その………あ、いない。」  
看護師「はい、らんちゃん、しょうくん。ママのそこへ移動しまちゅよ」  
らんとしょう「ばぶぶ」  
らん「じゃあ、また会いましょう。いつか。」  
しょう「しょう。」

### 無個性精子たちは泳いでる。無個性精子4はいない

ベツヤク「だいぶ減ったな！」

無個性精子5 「もうくわけわかんない」

無個性精子1 「入口で大分外にでてったぞ。」

無個性精子2 「なんだか勢いがなくなっちゃく」

ペイロニー 「はい第一関門突破」

無個性精子5 「あ！さっきのペペロン！」

ペイロニー 「ペイロニー！」

無個性精子5 「オネエ！」

ペイロニー 「あんたまだここにはオネエの概念はないはずでしょ。」

無個性精子5 「はい。」

ペイロニー 「ってか何この数！劣性！劣性！入口でダウンなんてあーたたち劣性！」

無個性精子1 「これから俺たちはどうすればいいんだよ！」

ペイロニー 「おうおう、取り見出し取り見出し。さーせん、さっきの冊子はどっかの入学案

内だったみたい…あっしさっきさっし間違えた。第7833回『争奪、受精レース』君たちには今からレースをしてもらいます。ただし、あなたたちの現段階のアクロゾムでは到底優性にはなれません。そう、あの空と、あの海へ行つて。空の底ひと海の底ひを見てきてご覧。そして明け方に本当の自分と出会えるはず。」

無個性精子5 「この人この説明7833回もやってるんでしょ？」

無個性精子1 「よくこんなに感情込めていえるよな。」

ペイロニー 「ひとまーず、君たちはイズモに行くんだわさ。黙って上へ上へ登り！その無個

性な真っ白に色イロ染めてくるのさ。」

無個性精子2 「む、こ、せ、い？」

ペイロニー 「ああ、あんたらら今おんなじ顔をしてるんだ。いや、本当はしていない。でも、同じ顔をしているんだ。でもしてない。(頭を指して) ここにインプットされているこう、二重だったり、たれ目だったり、パイオツカイデーだったり。そこに現実的なイロを加える。ちなみにイロはニホでいけるから。ヘトヘトになるけど。肝に銘じておきんしゃい。チャオ。」

無個性精子5 「こうして、僕たちのレースは始まった。この時点で半数以上の精子が死んだらしい。そして、ベツヤクがああの後、僕に近づいてきた。」

ベツヤク 「ついにレースの始まりだな。」

無個性精子5 「あ、うん」

ベツヤク 「緊張してるか」

無個性精子5 「なんだい、それ」

ベツヤク 「緊張だ。ココがドキドキする。」

無個性精子5 「へえーまだそんな感覚ないな」

ベツヤク 「残念、お前は一步も前に進んでない証拠だ。」

無個性精子5「ドキドキすると進むのかい？」

ベツヤク「ああ、大きな一歩だ。」

無個性精子5「楽しみだなく」

### ベツヤクと精子たち進む

幼稚園児たち「ミミズだーってオケラだーってアメンボだーってみんなみんな生きているんだ友だちなんだー」

先生「はい、よく歌えました！ここでお歌の時間は終わりです。じゃあみんな座って。今日

は新しいお友達を紹介します。どうぞ」

幼少しよう「……………」

先生「じゃあ、自己紹介しようか。」

幼少しよう「……………」

先生「ぼくの、」

幼少しよう「……………」

先生「なまえは、」

幼少しよう「……………」

先生「いとう、」

幼少しよう「……………」

先生「しよう、」

幼少しよう「……………」

先生「でー」

幼少しよう「……………」

先生「す。全部先生が言っちゃった。」

幼少しよう「……………」

先生「はい、今日からみんなのお友達、いとうしようくんです。はい、じゃあみんな並んで！」

### 幼稚園児並ぶ。交代で幼少しようと握手をする。リズムよく握手

先生「はい、じゃあ休み時間ですーみんな仲良く遊んでね。」

こどもたち「はいーい」

悪い子「ねえ、らんちゃん何してるの」

幼少らん「おえかき。」

悪い子「へーなんの」

幼少らん「分からない」

悪い子「なんで」

幼少らん「分からないんだもん」

悪い子「じゃあみして」

幼少らん「なんで」

悪い子「分からない」

幼少らん「だめ」

悪い子「なんで」

幼少らん「分からない」

悪い子、紙を無理やりとって破れる

らん泣く。

悪い子「らんちゃんが悪いんだよ。先生なかよくしようってゆったもん」

幼少らん「なんで、破ったの？」

悪い子「らんちゃんがみしてくれないからじゃん」

幼少らん「じゃあやぶってもいいの」

悪い子「……………らんちゃんのせいだもん。らんちゃんの……………らんちゃんの……………」

悪い子泣く。しょうがやってきて紙を直す。

幼少しよう「大丈夫だよ。破れたらつなげば。……………なんの絵？」

悪い子「らんちゃん絶対おしえてくれな」

幼少らん「家族」

悪い子「そうだよ。家族ってさっき言ったもん。」

幼少しよう「誰の？」

悪い子「らんちゃんの家族に決まって」

幼少らん「分からない」

悪い子「そう、分からない」

幼少しよう「三人いるね。」

幼少らん「うん。」

悪い子「三人いるね。……………うん。」

幼少しよう「あ、ごめん。真ん中の子ちよつとキズがついちゃった」

幼少らん「あ、ううん違う。最初から。」

幼少しよう「そうなんだ……………あの、ぼく、しょう。」

幼少らん「……………うん。」

幼少しよう「さっきは、その、緊、張してたんだけど、だから言えなかったけど、もう緊張してないけど、だから名前今からちゃんと言うけど」



幼少らん 「しょう…」  
幼少しよう 「ああ、もう言ってた」  
幼少らん 「……………らん。」  
幼少しよう 「らんちゃん。…僕、今、お友達いないから、お友達になってくれる？」  
幼少らん 「いいよ。」  
幼少らんと幼少しよう 「あくしゅをしたら…おともだち……………」。  
幼少しよう 「お、お砂場行こう。」  
幼少らん 「……………うん。さきちゃんとめぐちゃんも一緒に良い？」  
幼少しよう 「いいよ。じゃあシャベルもももってこ！」  
悪い子 「ねえ！俺もお友達になってもいいよ」  
幼少しよう 「あーくーしゅーをしーたーらーおーともーだーちー」  
悪い子 「おーい！」

雲の上。出雲である。広く高い、清らかな雲の上。

くう「今日も、明日も、昨日も、明後日も、一昨日も、運ぶ、ゆく、とても遅い。日く、遊泳。からの。繁栄。旅路、壁、追って、追いついて、追いかけて、追い返して、記憶。さあ、おいで。運ぶね。」

くう、ゆっくりやってきた無個性精子たちを呼ぶ

無個性精子1 「なんだろう、軽い」  
無個性精子5 「近づいていいのかな」  
無個性精子2 「もう、不思議な感覚っちゃね〜」  
無個性精子5 「でも、なんだか、とても遠い気がする。あそこまで」  
無個性精子1 「見えるけど、遠い。」  
無個性精子2 「本当にここにその、あれはあるっちゃね？」  
無個性精子1 「でもここまで一本道だったぞ」  
無個性精子2 「ふくん……………」  
無個性精子5 「ああ！もう、行く！」  
無個性精子1 「え！」  
無個性精子5 「どうせ行くことになるんだ！進む！」  
無個性精子1 「でも、ほら分からないじゃないか。いろいろあるだろうし」  
無個性精子5 「もう、行く！」

無個性精子5ゆく。無個性精子1と2と3の距離が離れてく。

くう「イロハ」

無個性精子5「ニホ」

2歩でくうの元へ到着した無個性精子5、へトへトである

くう「へト。へトね。よく来ました。あたしはくう。」

くう、無個性精子5の頬に青のイロを加える

無個性精子5「なに、これは」

くう「イロをあなたに授けます。」

無個性精子5「それは、つまりもうゴール？」

くう「いいえ、ここからがスタートと言ってもいいでしょう。まだ過去の話ですから……」

無個性精子5「まだ始まってなかったの！？もうくいやになっちゃうよ」

くう「シっ……聞こえますか？」

無個性精子5「くうさん……これはなに？」

くう「イロから成る始まりの音です」

無個性精子5「……」。

くう「あなたはもう無個性ではありません。」

無個性精子5「本当に！やった！」

くう「でも安心しないでくださいね。イロハの後は大体決まっていますから。」

無個性精子5「ん？どうということ？」

くう「心に音(ね)を持つ。ということですよ。あなたの名前は……のあ。」

無個性精子5改めのあ「のあ……名前」

くう「ええ」

のあ「のあ……」

くう「ここで名を持つことは非常に大切なことです。」

のあ「どのくらい大切なの？」

くう「命名といます。」

のあ「めいめい？」

くう「はい。名を授かると命が始まる。命の名前。ほら、さつきも聞こえたでしょ？」

のあ「聞こえる……心の……音(ね)。さつきよりも大きくー」

くう「はい。」

のあ「嬉しそうに)の……あ……」

くう「のあ、雲の下のあのアオへ向かうのです。道は一つしかありません。」

のあ「はい……………あ、ありがとう。その……………僕に、イロをくれて。」  
くう「ええ。あなたのイロを信じて。」  
のあ「きつと、どこかで……………また、会いましょう……………」  
くう「ええ。さようなら。」  
のあ「さようなら。」  
ベツヤク「あぶね〜」  
のあ「うわ！ベツヤク！いつのまに！」  
ベツヤク「すまんすまん。」  
のあ「なんだよ！びっくりして止まりそうになったよ」  
ベツヤク「なにが。」

## 間

のあ「心の……………音(ね)」  
ベツヤク「お前、まさか！」

## ベツヤク、のあの胸に耳を寄せる

ベツヤク「聞こえる……………」  
のあ「うん……………」  
ベツヤク「よおおおおし！！」  
のあ「なに！」  
ベツヤク「嬉しいぞベツヤク。」  
のあ「なんでそんなに喜ぶの。」  
ベツヤク「ハハ。」  
のあ「変な人！」  
ベツヤク「いいか。道は一つだ。最初から決まってる。本能で進め。」  
のあ「う、うん。ほかの子たちは？」  
ベツヤク「もうすぐ来るぞ。」  
のあ「良かった〜……………それにしてもここがゴールじゃないなんて不思議だね。」  
ベツヤク「ん？」  
のあ「だって、こんなに動ける。広くて、とても柔らかい」  
ベツヤク「ああ、それが雲ってもんだ。」  
のあ「あ！これがペイロニーが言ってた！雲！」  
ベツヤク「そしてここが雲の上、つまり空の底ひだ。ここからすべてが見える。」  
のあ「広いなあ…なにあっちにも道がある！あれ、そっちにも、ん！あの奥にも、なあ〜い

っばい道があるぞく！ねえ、ベツヤク！こっちの道に行った方が近いんじゃないの？あーでもなんか奥の方が楽に行けるんじゃないかと思う。たぶん、レースっていうくらいなんだからうまく近道を利用しないといけないんだよね、ベツヤク。」

ペイロニー「その通りです。」

のあ「うわ！」

ペイロニー「やっぱりねく大事よ。生きるためにの近道って。まあ、というか生き残るためのずる賢さっていうの？大事。でもここではちょっと違うんだな」

のあ「っていうのは」

ペイロニー「あんた、イイイロもらったじゃない。」

のあ「でしょ！のあって名前ももらったの！」

ペイロニー「ああよかったわねくんどこまで教えてもらったのよ。」

のあ「えつとくそれは」

ペイロニー「だーかーらの底ひでのイロハは教えてもらったのかってこと！」

のあ「心の……」

### 無個性精子たち各々走ってやってくる

無個性精子1改めネツ「ついに、ついに…ネツ！！俺のナマエ！！」

無個性精子2改めハル「ハル！あたいの名だっちゃ」

無個性精子3改めカク「ぼ、ぼくの名はカ、ツカク、カク」

ネツ、ハル、カク「もらったく！」

くう「みんな素敵な名です。」

ペイロニー「よござんす。よござんす。さあ、劣性もいなくなったところで次のステップに行きたいとおもいざんすが、みんな寄り耳な情報を教えてあげーる。んもおちよー耳穴

かっぼじって聞くのよ。まだ耳つくられてないけども。」

のあ「わーい！」

ペイロニー「ここにはなんともー楽な近い道があるのーね、いわゆる近道。」

ネツ「ええ！ってことはすぐに海まで行けるのか！」

ペイロニー「のうのうのう！なんと、もっと早くでられます。」

ハル「ってことはもしかして」

ペイロニー「このイズモから唯一早く抜けられる道『オリーブオル』を使えば！世にでら

れまーす！！」

### 精子たち歓喜

のあ「本当に！本当に？」

ペイロニー「もう、ここから出れば変なレースも参加しないでいいですよ。」  
カク「ぼ、ぼくみたいな、怪我をしている、のでも、立派な、」

ペイロニー「なれるなれる。ここから抜け出せば。早く、世を見ることができるとわさ。

早く、見ることが出来る。略してはやみよ！」

ネツ「その、もこみちってのはどこにあるんだ！」

ペイロニー「ちかみち〜ね、そっち。」

ネツ、ハル、カク急いでゆく

のあ「あああ、待ってみんな」

ハル「だっちゃ？」

のあ「やっぱりする？オリーブオイル」

ペイロニー「オリーブオイルだから〜それだともこみちだから〜」

ネツ「でも、ちかみちって」

ペイロニー「もこみちだから〜……あ、間違えたく合ってた〜」

ネツ「なんで使わないんだよ。もうこんなめんどくさいことしてられっかよ。」

のあ「そんなこと言うなよ！せつかく名前をもらったばかりじゃん」

ネツ「でもさ！この名前、世にでなきゃ意味ないんだよ。」

のあ「意味ない……」

ネツ「さつき学んだでしょ！この名は世に出るまで有効って。つまり世にでなきゃ一生このままだ。でもこのままなんてあり得ないんだ。」

のあ「じゃあ…つまり…」

ネツ「早く、この名を捨てる覚悟じゃないと……この名と心の音は僕たちのタイムリミットを表している。ペイロニーさん、そうですよね。」

ペイロニー「教官は、試験中の質問には一切お答えできません。」

ネツ「俺はいくよ。君たちと争うのも酷だ。こんなチャンスもうないかも」

のあ「でも、本能が違うっていつてるんだ！たしかに、そっちの方がいいかもしれないけど  
なんか違うというか。」

ネツ「だれが言ったそんなこと！」

ペイロニー「はいはいはい、ナイスファイトでした。締め切りだと思います〜ここまでし  
っかりイロハを学ぼうとしている彼らにオリーブオイルの道を教えます！のあ、あ  
んたはそっち」

のあ「えええ〜……」

ハル「もつたないっっちゃね〜」

カク「も、もうしわけない、けど、僕は、弱いからこっちへいくよ」

ネツ「精々地道に頑張ってくれ。」

のあ「…………ちよつと…………」

パイロニーが三本の綱を渡す。

ネツ、ハル、カク、飛ぶ。跳ぶ。とどろ。

パイロニー「さあ、勢いつけていざ！楽園じゃ〜」

ネツ「すげえ！勢いがましてくる！！」

ハル「なんだか、気持ちがよくなくなってきたっちゃ」

カク「き、きつい、よ。」

ネツ「がんばれ、これさえ終わればでれるぞ！」

ハル「ひ、ひかりがみえるっちゃー！」

ネツ「おお、くるぞ！」

カク「ううう、ううう」

ネツ、ハル、カク「いっくううううううううううう」

楽園。風船が舞い散る。がコンドームで作られた物である。

三人は幸せそうに遊泳している

パイロニー「イロハニホヘトチリヌルヲ」

くう「色の花は匂うけれどいつか散ってしまう。」

パイロニー「ワガヨタレヅツネナラム」

くう「私の人生も永遠でありえようか」

パイロニー「ウイノオクヤマケフコエテ」

くう「有為の深い山を今日越えて」

パイロニー「アサキユメミジエヒモセズ」

くう「浅はかな夢など見るまい、酔ったりもしない」

音楽が三人を滑稽に映す

くう「イロハの教え。残念です。道は一つしかない。」

のあ「まさか…………」

パイロニー「生きるという本能に逆らい、楽をしようとする劣性なんていらなさんす。そんなやつは行き先はティッシュかゴムで充分さんす。」

のあ「だからって何も言わずに、誘導するなんて酷すぎるよ。…黙ってないでなんか言っ

てよ！」

パイロニー「試験中のクレーム対応は一切受け付けておりません。」

のあ「もういい。いく。ベツヤク！ベツヤク！……（ゆく）」

子供たち、先生と一緒に保健体育の映像を見ている。

ミクちゃん「んんんんん」

斎藤さん「あ、あ、ううううう」

ミクちゃん「ああ、すごい」

斎藤さん「ああ、こんなに……かわいいそうに」

ミクちゃん「なにがー？」

斎藤さん「僕の子種さん、こんなにいっぱい出てるのに捨てられちゃうんだから。」

ミクちゃん「でも仕方ないじゃん。それ使わないときー」

斎藤さん「まあ、そうだけど…使わなくてもいいんだよ…フフフ」

悪い子「………えっこれなんの授業！?!?!」

先生「はい、というわけで、彼らはこれ（コンドーム）を使って『今』ではなく『今度、産む』という判断にでた訳ですね。少し刺激的な内容でしたがこれも大事な教育の一つです。」

ふうこ「はい先生！」

先生「はい、ふうこちゃん」

ふうこ「愛はお金で買えますか？」

先生「買えません。次！」

前田「はい先生！」

先生「はい、しようくん！」

しよう「なんで子供を作るんですか？」

先生「人間、子孫繁栄のために生きているからです。次」

こまつ「はい先生！」

先生「はい、こまつくん」

こまつ「愛ってお金で買えますか？」

先生「だから、かえねーよバカ次！」

ともやす「はい、先生！」

先生「はい、ともやすくん」

ともやす「子供って一人じゃ作れないんですか？」

先生「つくれません。2人必要です」

ともやす「じゃあ、逆になんで3人じゃだめなんですか」

先生「え、それはだって、ねーケンカしちゃうでしょ」

ともやす「ケンカ？」

先生「だって、嫌でしょ、その…嫉妬というか」

ともやす「嫉妬？先生さつき人間は子孫繁栄のために生きているとおっしゃってましたよね。その最大の目的である子孫繁栄の行為が達成されるのであれば感情なんていら  
ないんじゃないですか！」

悪い子「そうだそうだ！」

先生「だから、最低でも最高でも2人いればできると言うわけですよ！」

ともやす「ですから、ぼくはなぜ3人じゃだめなのかと聞いているのであって」

先生「うるせえええええ！しるかあああそんな知りたかったら3人でも4人でもやって  
みたらいいじゃねえか！バカ！バーカ！」

ともやす「……………」。

青年しよう「はい、先生」

先生「はい、しようくん」

青年しよう「好きな……」

先生「はい？」

青年しよう「好きな……子……」

こまつ「どした？」

悪い子「なんだよしよう早く言えよ」

こまつ「今言おうとしてるだろ」

悪い子「はあ？だつて聞こえないし、聞こえなかったら意味わかんねえしは？意味わかんねえしは？」

ともやす「しようくん、無理して言う必要はないと思うよ」

先生「しようくん、特にならぬ授業これで終わりにしますよ」

青年しよう「はい……特にな」

らん「いくじなし！！！」

一同「え？」

らん「あ…………その……育児って大変ですよ。育児なしでは子供は……」

先生「そうですね。今らんさんが良いことを言ってくれました。次の授業は子供が生まれて  
からの育児についての授業です。はい、ともやすくん号令〜」

ともやす「起立！令。さようなら！」

一同帰路につく 青年しようは遠目でらんをみている

悪い子「ねえらんちゃん、今日さー」

らん「うん」

悪い子「あの…………一緒にさー」

らん「うん」

悪い子「今日、一緒に帰ってあげてもいいよ」



こまつ「あ、いた、おいお前今日直だろ」  
悪い子「は、今から行くし。意味分かんねーしは？」  
こまつ「ったく……」  
悪い子「今大事なところなの!!!筋肉バカには分からないの!」  
らん「ごめん」  
悪い子「え？」  
らん「ごめん、今日用事があるの」  
悪い子「あ、別にいいし、俺もそんな別に帰りたい訳じゃないし、なんなら俺家、ねえし。」  
らん「そっか……」  
悪い子「うん……こ、こ、こまつ一緒に今日帰ろうぜ〜」(涙)

### らんは青年しようと合流

らん「ごめん、遅れて」  
青年しよう「ううん。何話してたの？」  
らん「ううん、特になんでもないよ」  
青年しよう「そうか。……今日体育楽しかったね!」  
らん「うん。」  
青年しよう「……………」  
らん「そういえばさ、先生に何聞こうとしてたの？」  
青年しよう「え、」  
らん「あの時さ……」  
青年しよう「別に……」  
らん「そう……」

### もどかしい、青春ならではの間

2人「ねえ」  
2人「あ……………」  
らん「しょうくん…今好きな子いる？」  
青年しよう「え？」  
らん「好きな子。」  
青年しよう「いるよ。僕の心臓を叩く、大事な人がいる。」  
らん「そっか。素敵だね。」  
青年しよう「あの!!!」

しょう、らんと向き合う

青年しょう「あの！」

しょう自分の心臓に手を当てる。そして、らんの胸に手をあてる

らん「えっ」

青年しょう「あっ」

らん胸にあたっている手を上から包むように抑える

らん「なんだか、良くわからないけど、この手から伝わるものはなんですか？」

青年しょう「それは……」

らん「これは、その、私への愛ですか？それとも興味本位から触ってしまった、おっぱいへの愛ですか？」

青年しょう「いっぱいのお愛です。らんちゃんへの。」

無個性精子2193537だったベツヤクの心の音が動き出す

ベツヤク（ミノル）「心の音………」

くう「あなたの名前はミノル」

ベツヤク「ミノル………！！（心臓に手をあてて）動いてる！！」

くう「これから、あなたはあのアオに向かうのです。」

ベツヤク「よおし」

くう「心の音の興奮はここだけの話なしここままであとは個々で行動するしかありません。混乱するのも分かりますが、ここでは個性を出してください。」

ベツヤク「どうして！！」

くう「恋心から恋焦がれに変わったからです。」

ベツヤク「誰が！！」

くう「お父さんとお母さんです。」

ベツヤク「どうして！！」

くう「あなたが、こゝどもになるためです」

ベツヤク「これは、大きな一歩？」

くう「小さな小さな個体が歩む、はじめの一歩です。」

ベツヤク「僕は行くよ。」

くう「あのアオへ。」

## ベツヤクとぶ

しよう「遠い幻想のようだ。煌めいた星座に花を添える。つなかりを感じる。単純な作業で、僕は今日息をしている。群青は僕を呼んだ。アオから君がやってくるんだ。この宇宙の根源は混沌で僕にはまだ、分からないけど、確実に近づいて来るのは分かる。綴るだけの作業はやめて。君に惹かれてから数年がたった。そして君は、君は、君を呼んだ。僕も呼んだんだ。」

成人しよう「……………」

らん「お待たせ…」

成人しよう「どうだった。」

らん「(〇のサイン)」

成人しよう「えっ……………」

らん「しょうくん、これからもよろしくね。」

## ベツヤクの鼓動が速くなる

ベツヤク「なあくう。なあくう。心の音がどんどん大きくなってくる」

## さらにとぶベツヤクと強い鼓動

らん「男の子だって」

成人しよう「そうかく。これからはこの子のためにも、俺頑張る。これからもよろしくねらん」

## ベツヤクは力尽きる

ベツヤク「足が…………動かない…………くう、くう！足が、動かないんだ。くう！どこにいるんだ。

ねえ……………こゝまで来て、ねえ！」

## ベツヤクの心の音止まる。

場は変わり海の底ひ。前田とともやすがいる

ともやす「……………前田、ゝ、暇」

前田「あ……………はい。」

ともやす「ゲーム、する」

前田「だめだよ、今はそういう、時間じゃない、」

ともやす「、予習、」

前田「そうか……」

ともやす「……………『いっばい』の『い』を『お』に。変える。言って。」

前田「……………その、『い』は意味の『い』？それとも胃の『い』？」

ともやす「どちらでも『い』。」

前田「すごい、いいかげんな問題だね。」

ともやす「どんなもんだい。」

前田「そんな問題？」

ともやす「……………今のは、自慢の『意』も持つどんなもんだい。さあ、早く」

前田「いっばいの意味を『お』に変えるんだよね」

ともやす「違う、いっばいの『い』を『お』に変える」

前田「……………その、『い』は意味の『い』？それとも胃の『い』？」

ともやす「……………ああああああああ。」

### 子待つ登場、手には天かすを持っている

子待つ「やってるなく」

ともやす「だめっす、難しいです。」

子待つ「ちよつくら泳いできたらどうだ。ダイビングも気持ちいぞ」

ともやす「ここは海の底ひですからこれ以上は潜れません。」

子待つ「ああ、そうだったそうだった」

ともやす「上からの連絡だと大分もう減ってるみたいですね。」

子待つ「ああ、そう。まあ、そうでしょ。ここが最後の砦みたいなもんだもの『いっばい』」

きたらパンクしちゃうよ。」

前田「そのいっばいの『い』は……………」

ともやす「ああああああああ、すいません新入りなもんで」

前田「……………すいません。」

子待つ「名前は何？」

前田「前田です。後ろにいても。」

子待つ「まあ、じゃあしっかり勉強するように」

前田「あの……………」

ともやす「だから」

前田「さつき、ここに来る前に、助けました。」

ともやす「は？」

前田「背の高いやつがもってきて、受け取ったんです。」  
ともやす「はああああ？」

いつの間にか前田の腕の中にはあがいる。自分で心の音を聞こうとするが聞けない

のあ「は！……クソ、クソ、クソ………」

ともやす「なにをしているんだ？」

のあ「クソクソクソ」

万策尽きてとつさに子待つの耳に胸を当てる

のあ「聞こえる？心の音……」

子待つ「嗚呼……」

のあ「良かった……」

のあ、安堵の表情を浮かべ子待つから離れようとするが子待つが離さない

子待つ「嗚呼……」

のあ「良かった〜」

子待つ「嗚呼……」

のあ「ん？」

子待つ「嗚呼……」

ともやす「子待つ様？」

子待つ「嗚呼……」

ともやす（これはだめだと思い）「子待つ様っ」

子待つ「待っていた！！私はこれを待っていた！」

のあ「え？」

子待つ「名前は！君の名前は！」

のあ「のあ……」

子待つ「そうか！いい名だ。私はコマツ『子を待つ』と書いてコマツだ」

のあ「ああ、どうも……ここは……」

子待つ「海の底ひ。最後の場所だ。」

のあ「そう、やっと、ここまで来たんだね……」

子待つ「いや本当によくここまで来たよ。」

のあ「何を食べてるの？」

子待つ「ん？ああ、これか。」

のあ「うん」

子待つ「君らの同志だよ。」

のあ「同志？」

子待つ「のあ、お前空の底ひからここまではるばるやってきたんだろ」

のあ「うん」

子待つ「そして、ここまでたどり着いたのがのあ、お前だけだ」

のあ「……うん……」

子待つ「みんな、かすになつて天から降ってきた。それが海の底ひに、溜まる。コロモになれなかった天かすを俺が成仏させるのさ。(小声) これネツかな(食う) これはハルかな(食う)」

のあ「コロモってなんだい」

子待つ「コロモはコロモだ、君だつてコロモになろうとしている。」

のあ「僕はコロモになるの？」

子待つ「心の音にまとうんだよ。」

のあ「まとう？」

子待つ「イロハは空で学んだか？」

のあ「うん！チリヌルヲ。」

子待つ「おう、ここでは『まとうのさ』お前らも聞いとけ」

前田「はい」

ともやす「目をいっばいつけて。石のように固い意志をもって。」

前田「どういうこと？」

ともやす「だつて、めでゆーさつて」

子待つ「まとうのさ。イロハで心の音は動き始めた。始まりの合図でもある。そして今伝え

した通りここは最後の地だ。あとはあいうえおをまとう。」

のあ「また難しそうなのが出て来たよ……そうだ、ベツヤク！ベツヤクはどこに行ったの？」

子待つ「気絶したお前をここまで運んで来たよ。」

のあ「え？」

子待つ「普通、気絶した精子はそこで終了だ。劣性扱いとなり。ペイロニーの手で天かす行き。

だが、お前は運がいいよ。ドーしてあいつもあんなにやるか……」

のあ「やっぱり僕を助けてくれてたんだね。」

### 縄に引つかかった状態のベツヤク

らん「しょうくん……」

しょう「らん、話つて」

らん「『めんなび』」

しょう「え……」

らん「お腹の子、駄目だって……」

しょう「……………そっか。」

らん「そっかって？」

しょう「……………」

らん「ごめんね。私の身体がこんなだから、せつかくしょうくんとの子なのに私の身体がこんなだから……」

しょう「大丈夫、また……………ほらね。また子供は……」

らん「……………」

### しょう、らんから離れる

らん「……………言えないよ……………もう……」

ベツヤク「ごめんなさい」

らん「……………もう、もう子ども、ダメかも……なんて……」

ベツヤク「ごめんなさい」

らん「言えるわけないよ！しょうくんあんなに楽しみにしてたのに……」

ベツヤク「俺が！劣性で！その……………ひっかかっちゃって、」

らん「……………」

ベツヤク「イロイロ覚えたのに……ここまで来たのに……ごめんなさい」

らん「……………でも、ありがとう。」

ベツヤク「え？」

らん「結局、一度も会えなかったけど、あなたの顔を見ることはできなかったけど、私を選んでくれてありがとう。」

ベツヤク「……………」

らん「私、ママにはなれなかったけど、あなたは、立派な、しょうくと私の子。」

ベツヤク「ごめんなさい。」

らん「なんで謝るの？」

ベツヤク「ごめんなさい」

らん「ごめんなさい」

ベツヤク「ごめんなさい」

らん「ごめんなさい」

### 間

らん「あのね、冗談かと思うでしょうけど、私、あなたと会ったことがある気がするの。」

ベツヤク「え？」

らん「最近知ったんだけどね、私、しようくと同じ病院で生まれたんだって。もちろん隣がしようくんだったなんて覚えてないけど、その時ね、よく分からないけど、誰かとお喋りした気がするの。」

ベツヤク「……………」

らん「そのあとも、理由もなく家族の絵をかいたり……………きつとあれはあなただったんじゃないかと思うの。」

ベツヤク「……………」

らん「だからね、こんなこと言う資格私にはないけど、お母さんて、自分の子とはずーっとつながってると思うの。」

ベツヤク「僕は…あなたの子にはなれなかった。そして、あなたの身体に負担をかけた。こんな劣性で、こんな劣性で……………こんな劣性だけど、でも……………僕も、あなたに会いたかった。あいうえおで親というものを習いました。そして、あなたとしようくんの愛の結晶が僕だと分かりました。だからこそ、あなたたち二人に会って恩返しがしたかった。」

らん「一度でいいから会って抱きしめてあげたかった。ごめんね。」

ベツヤク「僕は、あなたのことにはなれなかったけど、ここに残って、天かすにならずに、必ず、あなたの元へ素敵な…僕より立派な……………」

らん「また、会いましょう。いつか。」

ベツヤクその場を去る

しようがらん近づき抱きしめる

しよう「こどものことはさ、大丈夫だよ。俺はらんがいればそれで幸せ」

らん「しようくん…」

全てを包み込むしよう。それに身をゆだねるらん

場は変わり海の底ひ。『お』の上に子待つがのっている

子待つ「だからーイロハニホヘトは一回忘れてー！」

のあ「難しいよ〜」

子待つ「いいか、命は必ず『あいうえお』から始まるんだ。」

のあ「だから、なんで『あいうえお』なの」

子待つ『お』の『うえ』にのっているからっか

のあ「お〜？子待つだっつてのってるじゃん。」

子待つ「そう、これにのるんだ。」

のあ「は〜？」



子待つ「そして、『あい』に『うえ』でいる二人が存在する。」  
のあ「2人も？」

子待つ「そうだ、異なる異性の二人が『あい』に『うえ』でいる。それが君のお父さんとお母さんだ。」

のあ「お父さんと…お母さん…」

子待つ「そうだ。『あい』に『うえ』でいる『お』父さんと『お』母さん。その『お』父さん『お』母さんの『うえ』に『あい』が生まれると君が誕生するわけだ。」

のあ「でも、その『あい』ってのはどうやって生まれるんだ。」

子待つ「良い質問だのあ、ズバリ『いう』んだよ。『あい』を『いう』んだ。ただ、これが難しんだとよ。あっちの世界では。」

のあ「そうなのかくいうのかく(前田に) あい！あい！あい！」

子待つ「こちらから…そして、『いう』の隣には必ず『きく』が待っている。誰かが何かを『いう』たら『きく』ものが現れる。これが『かきくけこ』ッテわけだ。」

のあ「なるほど……」

子待つ「そして、その『あい』が聞こえて、実ったら……」

のあ「実ったら？」

子待つ「次は、『しす』の」

のあ「しす……」

子待つ「子を作り、使命を終える。だが、悲しむことはないぞ。その後もあるんだ。」

のあ「ええ！死んだあとなんて存在するの？」

子待つ「嗚呼……『しす』の隣には『ちつ』が眠っている。だから、また『お』母さんの中へと戻るのさ。」

のあ『お』母さんてすごいひとなんだね。」

子待つ「この並びはながあっても変わらない。今日も、『お』の『うえ』には『あい』があるし、明日も『しす』の隣には『ちつ』が眠っている。のあが誕生するきっかけとな

ったのも、『あい』が言葉になり、いつしかそれが言霊になった。やがて言霊は魂を生み。コロモになる。」

のあ「心の音が……痛い……」

子待つ「近づいてきたな。」

のあ「ああああああああああ、なんか見える。僕の、かたちを作る。大きな何かが。あれが、僕の『お』？……空から見てるんじゃない、海からでもない。今、僕の目の前にある。すごい速さで、苦しむ。誰もいない回転木馬に永遠にのっている。周りは暗闇だけど、かすかに聞こえる音、聞こえる、聞こえる。外の音だ。僕の名前を呼んでる。うわああああ。羊だ。羊にちやぶちやぶと揺られて、気を取り戻す。僕の『お』はどこにあるんだ。」

ベツヤク「ぬおおおおお」

のあ「ベツヤク！」  
ベツヤク「良かった……」  
のあ「心の音が止まらないよ。」  
ベツヤク「ああ、順調な証拠だ。」  
のあ「僕はどうしたらいいの？」  
ベツヤク「今から、お前を送り出す。」  
のあ「え？」

### ベツヤク、のあへ全てを託す

のあ「これは」  
ベツヤク「跳べ！」  
のあ「え？」  
ベツヤク「いいから、進め！これがお前と『お』かあさんをつなぐ唯一の『お』だ。」  
のあ「分かった。ああ、子待つに……子待つ！ありがとう！また、どこかで会いましょう……」  
ただ、うみっというからてっきり大きなうみでもあるのかと……  
子待つ「ここは、『生み』の底ひだから！立派にな！」  
ベツヤク「さあ、のあ！」

### のあ、とぶ

ベツヤク「途中で、引っかかって、絶対諦めるんじゃないぞ。」  
のあ「うん。」  
ベツヤク「そしていつか、お前はのあじゃなくなる。」  
のあ「のあじゃなくなるって」  
ベツヤク「それがレースのゴールだ。」  
のあ「……ベツヤクも一緒だね。」  
ベツヤク「それは、無理だ。」  
のあ「どうして？」  
ベツヤク「それは……」  
のあ「ここまで来たならベツヤクも一緒にゴールしようよ。ねっ？きるよね？」  
ベツヤク「それはできないんだ。」  
のあ「どうして！」  
ベツヤク「俺には、『お』がないんだ！俺は、もう『お』母さんとはつながっていない。」  
のあ「そんな……」  
ベツヤク「……のあ！でも、今、お前は立派な『お』で『お』母さんにつながっている。い

いか。お前のお父さんとお母さんは、のあに会うためにたくさん辛い思いもした。でも、会いたくて会いたくてたまらないんだ。だから、その二人を、頼むから、もう悲しませないでくれ。」

のあ「うん……」

ベツヤク「きつと、のあはこれから俺の知らない、いっぱい『あい』に出会う。これは、今まで死んでいった精子は一切味わうことができないんだ。もつときつといるんなことがあるんだろう。でも、おれは『イロハ』から『あいうえお』までしか知らないから。もつとたくさんあつちの世界を知ってくれ。そしていつかのあが、誰かに『あい』を『いう』と時がくるだろう。その時はその相手にたくさん言っやっやっ欲しい。お前が『お』の上ののって、『あい』を『いう』て『きいて』『しす』のあ……そしてまたいつか、またいつか『ちつ』で会おう。ありがとうー！」

のあ「ベツヤク！……まだお会いしたことのない、僕のお父さん！僕のお母さん！僕は、今、あなたたちの愛を感じています。なんの彩りもない僕だけど、とても小さな僕だけど、この鼓動は偽りではなく、はつきりとなっています。それはもう心の音ではなく、一つの生命として、心臓の鼓動です。生きています。僕は今二人にとっても会いたいです。だから待っててください。もう少しでお会いできます。」

魂が、心の音を響かせながら、ゆっくりと宿っていく

## 幕

今日も、世界中のどこかにのあがいて、ベツヤクもいる。ネツだっているしハルだっている。この作品を演じる人間も、つくる人間も、最初は無個性精子だったわけである。その高い倍率は受かったものにも関わらずそれを実感することが難しい。意識があるのに意識がないという生命の畏が命の価値を下げていく。架空の話であるが、誰かの実体験かもしれないし、ここにいる誰かの話かもしれないから、19年、或いは20年前。